TOKUMA NOVELS

発行者　徳間康快
発行所　徳間書店
東京都港区新橋四ノ一〇　郵便番号一〇五
電話四三三・六二三一　振替東京四—四四三九二

日下圭介
木に登る犬

Keisuke Kusaka © 1982

カバー絵　福田隆義
カバーデザイン　矢島高光
落丁・乱丁はおとりかえいたします

Printed in Japan

〈編集担当　国田昌子〉

傑作サスペンス・ミステリー

木に登る犬

日下圭介

徳間書店

TOKUMA NOVELS

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

目次

木に登る犬　7
闇の奢り　33
緋色の記憶　63
遅すぎた手紙　83
とんでもない誤解　109
夫の犯罪　145
良薬、口に苦し　169
手紙　185
真っ赤な誕生祝い　209
奪われた遺書　233

木に登る犬

「木に登るんだよ。この犬」
そう云う子供の声が、ぼくの耳に届いた。ぼくは思わず、読みかけの文庫本を置いて、庭の方を見やった。
金魚のいる小さな池の向こうに、二人の子供と、二匹の犬が見えた。子供の一人は、ぼくの弟で、賢次だ。この夏で十一になった。もう一人は、隣の秀夫だ。賢次と同い年のはずだった。二人とも、ランニングシャツに半ズボンという格好だった。
犬が木に登る、と云ったのは、秀夫の方だった。
彼の脚元に、茶色の小さな犬がいた。たぶん雑種だろうが、いくらか柴犬の血を引いているのだろう。ぴんと立った両耳と、体の割りに太い尾が、きりりと巻いた姿はりりしく見えた。といって、まだ稚いのか、片手で楽に抱えられるほど小さかったが。
一方、賢次はセントバーナードをつないだ皮紐を握っていた。家で、もう七年も前から飼っている犬で、「マック」という名だ。老齢と運動不足、それに腹立たしいほどの美食のせいで、鈍重そうな体を、だらりと横たえていた。
ぼくは読書に夢中だったけれど、二人が犬の自慢をしあっていたことは、薄々知っていた。
賢次の方が優勢らしかった。マックは、人間より賢いんだぜ。すわれ、伏せ、待て、なんでもできるんだ。それに、ボールを投げるとさ、くわえて戻って来ることだって、できるんだぜ。君の犬に、できないだろう。
だって、まだ子供なんだもの。秀夫は、口ごもった。

いまに教えるよ。きっと、何でもやれるようになるさ。
やれるもんか。賢次が笑った。君の犬に血統書があるかよ。利巧な犬には、血統書があるんだ。ないのは、ばか犬なんだよ。
これが決定的だったようだ。秀夫は俯いたまま、黙ってしまった。しかしやがて、思い出したように云ったのが、この言葉だった。
「木に登るんだよ。この犬」
今度は、賢次がぽかんと口を開いたまま、黙り込んだ。でも、すぐに吹き出した。
「嘘だあ。犬が木に登るなんて」
「だって、登ったんだもん」
「じゃあさあ、そこに登らせてみろよ」
庭の中央にある松の木を、賢次は顎で指した。
「……うん」
秀夫は自信なげに頷き、犬を呼んだ。「さあ、コロ。おいで」
ぼくもつい、背を伸ばした。
小さな犬は、うれしそうに尾を振ると、秀夫に従って、松の根元へ進んだ。
「登るんだよ、ここに」秀夫は指さした。しかし、犬は不思議そうに首を振るだけだった。賢次が、かん高く笑った。秀夫は苛立ち、犬の尻を、松の幹に押し上げた。犬は、哀れな鳴き声を出し、ずるずると滑り落ちた。賢次は笑い続けた。一層高い声で。
「そうら見ろよ。登れるわけがないだろう」賢次は、勝ちほこった。「ねえ兄さん」
その質問に、ぼくは答えたくなかった。でも仕方なく、サンダルをつっかけて庭におりた。夏の午後の光は、肌の奥まで射し込むようだった。
「どうしたの、その犬」
うなだれている秀夫に、ぼくは尋ねた。
「進ちゃんの犬だったの。ぼくが貰ったの」
秀夫は、陽焼けした顔を上げた。
それをきいて納得がいった。
進という子は、秀夫のさらに隣に住んでいた。隣といっても、雑木林を挟んでいるから、五十メートルは離れているが。彼もまた、賢次らと同学年だった。
その子が死んだ。ぼくが夏休みで、東京から帰って来て十日ほど過ぎた日だったから、もう一週間になる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

ここから一キロほど北の、営林署の裏手にある沢で死んでいた。沢といっても、上流にダムが出来たため、ふだんは水量のない涸沢だ。ダムと同時に出来た林道が通っていて、そこから深い崖になっている。進の死体は、あちこちの骨が砕けていた。だから、林道で遊んでいて転落したのだと、警察は断定したらしい。

進は、前の日の昼過ぎに家を出たままだった。夜になっても帰らないというので、ぼくの家を含めて、近所じゅう大騒ぎになった。むろん駐在へも届けた。

結局、死体をみつけたのは営林署員で、次の日も夕方になってからだった。無残に砕かれた進は、一匹の玉虫を握りしめていたそうだ。玉虫も、もちろん死んでいた。

その光景を想像すると、ぼくの胸は、きゅんとなってしまう。岩の上に倒れた幼い子。血に染まったシャツ。手の中の玉虫。その、七色の光沢——。

電力会社に勤めている進の父は、息子の死を理解しかねているらしい。あんな沢へ遊びに行く理由はないし、かりに行ったとしても、誤って足を滑らしたりはしないはずだ、と。あの子は、猿みたいに、すばしこいのにと、涙を流していた。

その点では、ぼくも賛成だ。小柄だが、敏捷なやんちゃ坊主だった。走る、跳ぶ、泳ぐ——。体を使うことなら、少々の大人も顔負けだったのだ。

区長をしているぼくの父は、それを聞いて、もう一度警察に出向いた。全く親父の面倒見のよさというか、世話好きには参ってしまう。と、ぼくも人を笑えない。ぼくもついて行ったのだから。

署長は顔見知りだ。禿げ上がった頭の、人の好さそうな男だ。

彼は笑った。進の死に、不審な点などないと云った。

進が足を滑らせた林道に、靴跡が残っていた。まぎれもなく、進自身がつけた靴跡だった。前夜の雨で、土が柔らかくなっていたらしい。多分、崖の上にいる玉虫をみつけて、手を伸ばした途端に崩れたに違いない。

——それじゃあ、問題はなにもありませんね。ぼくが云うと、署長は笑顔で頷いたが、すぐに真顔に戻った。

——実は、一つだけ……。

——え？

――いや、大したことじゃないんだが。彼の帽子が見当たらないんだよ。家を出る時、かぶって出たそうなんだが……。
――緑色の帽子ですか。
――うん。
それなら、ぼくも憶えていた。東京から来た親戚の人から、土産に貰ったといっていた。よほど気に入っているとみえて、遊びに来た時など、家の中でも脱がなかった。
賢次も同じものを欲しがった。でも、この田舎町には売ってもいない。そういうと、ねたんでか、進の帽子を奪っては泣きべそをかかしていた。
――落ちる時、風にでも飛ばされたんだろう。詰まらなそうに云って、父は立ち上がった。
ともかくコロという犬は、進が大層可愛がっていたようだ。残された両親には、世話するのも悲しいのか、秀夫が貰うことになったという。
「犬が木に登れるわけねえだろう」
まだ、賢次は笑っていた。
「登るんだってば……」秀夫も、むきになっていた。
「ほかの木じゃだめだけどさ。お宮の裏にある、楠に登るんだぜ。本当だぜ」
「楠にか」
「うん、嘘だってんなら、あしたにでも行ってみようよ。この犬、きっと登ってみせるからさ」
「……ああ」
今度は、賢次が気弱な返事をした。

翌日、日中の陽差しが、いくぶん弱まる時間を待って、秀夫と賢次が出ていった。むろん、主人公のコロを連れて。
ぼくは、妙に落ち着かない気持ちで、彼等の帰りを待った。
二人が戻って来た時は、陽が落ちた後だった。秀夫も賢次も、元気がなかった。疲れたような顔で、口数も少なかった。
「コロは楠の木に登ったのかね」
冷たいジュースを出してやりながら、ぼくは、どちらにもなく笑顔を向けた。
すると二人の返事が、同時にあった。

「登らなかったよ」と、賢次。
「登ったよ」と秀夫。
「どっちなんだい」ぼくは、巧みな司会者よろしく、二人から順に話をきいた。
こういうことなのだ。
コロは確かに、楠の根元までゆくと、登る意欲を示した。天を圧する巨木の枝を見上げ、さかんに吠えた。おとなが三人手を伸ばして、やっと抱え切れるほどの太い幹を、吠えながらぐるぐる回った。そして前脚を樹肌にかけて立ち上がり、登り始めた。
だが、登ったのは、せいぜい四、五十センチ——秀夫は一メートル以上だと唇を尖がらせたが——結局、ずるりと滑り落ちたというのだ。
「調子悪かったんだよ。きょうは」秀夫は、おとなびた溜息をついた。「何人も見に来て、けしかけたり、からかったりするんだもん。ぼく一人でなくちゃ、調子出ないんだよ。あした朝早く行くからさあ。そうだ、八時に楠のところへ来てよ。こんどは絶対に登ったとこを見せるよ」
少し寝坊したぼくが、歯を磨いている時に、賢次が帰って来た。
「楠へ行って来たのか」
「うん」賢次は、タイガースのマークがついた野球帽を放り投げ、濡れ縁に腰を下ろした。肩を落として、自分の足先を見据えていた。
「どうだった」歯ブラシを動かしたままで、ぼくは聞いた。
「登ってたよ」
「登ったのか、木に」
「登るとこを見たんじゃないんだ。ぼくが行ったらさあ、コロは低い枝の上にいて、上を向いて吠えてたんだ」
「じゃあ、登ったんじゃないか」
「どうかな」
「登ったんだよ、賢次」ぼくは急いで口をゆすぎ、弟の肩を叩いた。「登ったことにするんだ」
いやな予感がしたので、そう云った。
賢次は首を振った。同意だか反撥だか、分からない振り方だった。

ぼくの不安は、翌々日的中した。
駅前の本屋に行った帰り、材木置場の脇を通ると、四、五人の子供が云い争っていた。輪の中の子が泣いていた。秀夫だった。
「どうしたんだい」
ぼくは自転車を降りて近付いた。
「秀夫ったらさ」ひときわ背の高い子が彼の背をこづいた。「いんちきしやがんのさ」
「いんちき？」
「そうさ、ひどいいんちきなんだよな。犬が木に登るなんて嘘ついてさ。本当は、誰もいない間に、この犬を持ち上げて、枝に乗せただけなのにさ」
「だけど、犬が上を見て登りたそうにしたのは事実なんだろ」ぼくは云った。秀夫への助け舟のつもりだった。
「それもいんちきさ。もう少し上の枝に、こんなのがあったんだよ」
別の子が、丸めた新聞紙を広げた。嫌な臭いがして、死んだ雀が出て来た。胸の辺りに錐で刺したような穴があり、黒い血が羽毛を汚していた。空気銃で撃たれた雀だった。
やっぱりか。ぼくは暗い気持ちになった。弟から話を聞いた時から、その単純なトリックは見破っていた。
「大したことじゃないよ。まあ冗談みたいなものじゃないか。許してやれよ」
ぼくは、笑顔を作って、泣きじゃくる秀夫の頭に手を置いた。そのおかっぱ頭を、秀夫は激しく左右に振った。
「本当なんだ。登ったんだよ、コロが」
コロは、そうだというふうに、威勢よく吠えた。
「だって、コロが木に登るところを、君以外に見てない以上……」
げんなりと、ぼくが云い終わらないうちに、秀夫は叫んだ。
「ぼくだけじゃないよ。見たのは、ぼくだけじゃないよ」
「誰が見たんだね」
「真知子って、お姉さんさ。楠の木の下に住んでいる」

「真知子さん……」ぼくは、少しうろたえたかもしれない。だから慌ててつけ加えた。
「じゃあ、その人が証言したら信じようじゃないか。ねえ、いいだろう？　みんな」
「証言なんか、してくれるもんか」止せばいいのに、憎々しく云ったのは、弟の賢次だった。
「証言してくれるさ」秀夫は元気になっていた。「賭けてもいいよ。百円でも二百円でも……。うん五百円賭けよう」
「五百円？」弟はちょっとたじろいだが、
「いいさ、賭けようぜ」もう引っ込みがつかなくなったらしい。
あした、その女性を訪ねることにして別れた。

「賭けなんか、しなけりゃ良かった」
濡れ縁に腰を下ろして、ぼくはつぶやいた。
賢次は答えなかった。代わりに、腿にとまった蚊を、叩きつぶした。
ぼくは、闇に咲く月見草を見つめていた。でも弟の表情は分かっていた。彼は後悔しているのだ。

賢次とぼくは、ちょうど十歳違うが、二人だけの兄弟だった。彼は、学校へ入るまで病弱だった。おまけに、両親が年取ってから生まれた子なので、必要以上に甘やかされて育った。縫製工場を営む父は、泣きつかれると何でも買い与えた。
わがままで強情なのは、そのせいだろう。そのくせ神経質で内向的だった。ある点では早熟なくせに、別のところでは、ひどく幼なかった。
だから、彼に友達は少ない様子だった。その一人が、進だった。だから進が死んだと知った時、一日中、自分の部屋で泣きじゃくっていたのを、ぼくは見ている。
残る親友が秀夫だった。彼は、半年前、父の転勤に従って引っ越して来た。だから、賢次との交際は、まだ浅い。浅いうちが肝心なのだ。
それなのに、もう対立が始まってしまった。犬が木登りできるか、どうか、などという、ばかげた話で。
その時だった。きらきらと宝石のように輝くものが視界をよぎり、流星みたいに飛んで来た。
賢次が、反射的に腕を伸ばすと、器用にそいつを捕えた。掌を広げると、玉虫だった。この庭に、玉虫が

好む樹木でもあるのか、しばしば飛んでくる。
掌の上でうごめく妖しい光の虫を、弟はじっと見つめていた。放心したようだった。死んだ進のことを、思い出しているのだろう。彼は、一匹の玉虫のために命を落としたからだ。
友を失うのは辛いことだ。秀夫とは仲良くしろよ。だが、ぼくはそれを口に出さなかった。
あす、ひとつの決着が着く。どう着くものか、ぼくにも考えることが出来なかった。
真知子、という娘が、どう証言するか。
真知子。その名は、甘酸っぱい思いを、ぼくの胸によみがえらせる。青い果実のような思いを——。

次の日は、日曜日だった。もっとも、夏休みだから関係はないが。
夕方、ぼくは、賢次と秀夫とともに、真知子の家に向かった。
老化した山のふもとを切り拓いて、青々と水田が広がっている。小高い所に位置した古い神社があって、裏手に森が続いている。雑木林の貧弱な森が、結構奥深くみえるのは、一本の老楠のせいだった。雑木どもを威圧するごとく、枝を存分に伸ばしている。その一本一本の枝でさえ、ありきたりの樹木よりも風格がある。分厚い葉の緑が、螺鈿細工のような贅沢さで、夏の光を照り返していた。
その少し外れに、真知子の家があった。古い平屋で、さほど小さくはないが、楠の枝に隠れると貧相にみえた。実際に、陽は遮られ陰気なたたずまいだった。
崩れかけた板塀の陰にクリーム色の中型車が止められていた。それは真知子のものだった。ドアのところの、へこみさえ憶えている。彼女の運転でドライブしたこともあった。
細く開いたガラス戸から、秀夫が声をかけた。「こんにちは」
ぼくは、とっくに使われなくなった古井戸の横に立っていた。セミの声が、うるさいほどだった。ぼくの動悸は高まっていた。初めて、彼女に恋を打ち明けた二年前のように。
それを静めるために、煙草に火をつけた。
「こんにちは」秀夫が、声を大きくした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton